

平和記念式典に参加した伊丹市立伊丹高校教諭の畑井克彦さん(59)＝尼崎市。母茂子さんは被爆者救護で広島市に入ってから残留放射能を浴び、2009年に82歳で亡くなるまで病魔にさいなまれ続けた。「70年前の夏、暑い中でよう頑張ったんやな」。慰霊碑の前にたたずみ、克彦さんは静かに語り掛けた。

兵庫県被爆二世の会 尼崎の畑井克彦さん

病魔にさいなまれ続け逝った―― 母の苦しみ後世に伝える

広島市)の女学校に通っていた。原爆投下の約1週間後、学徒動員され、爆心地から約410分の国民学校で救護活動を手伝った。

死臭漂う救護所。けが人の体にわくろじ虫を箸で取り除き、傷口に赤子を塗った。夏が来るたび、茂子さんは心に刻

まれた悪夢を語った。だが、克彦さんは「母から被爆体験を聞くのが嫌で、僕に何せえつちゅうねん」と。中学2年のころを最後に、ヒロシマが話題に上ることはなくなつたという。

教師としての活動の一端で被爆者の証言を集めた10年前から、克彦さん

安を抱えるが、茂子さんの名前が記された原爆死没者名簿が奉納された5年前に続き、式典に足を運んだ。「元気なうちに、広島で生きた母の面影をつなぎ止めたかった」。原爆が残した負の遺産を伝え、向き合い続けることを、亡き母に約束した。

(井上 駿)

平和記念式典に出席し、慰霊碑の前で平和への願いを語る畑井克彦さん＝6日午前、広島市の平和記念公園

